

22 節. 「向こう岸」とは、主イエスと弟子たちから見ての場所。

22 節の最後にある「気づいた」と訳されている言葉 (εἶδον、エイドン) は、「見た」という意味。【NKJV】 6:22 On the following day, when the people who were standing on the other side of the sea saw that there was no other boat there, except that one which His disciples had entered, and that Jesus had not entered the boat with His disciples, but His disciples had gone away alone— 「群衆もまた奇跡の間接的証人であることを表す」 (伊吹)

23 節. パンの奇跡が行われた場所とは書かず、「主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所」という表現しているのは、「パンの奇跡が聖体の拝受と解釈されており、おそらくその意味で、すなわちアナムネーシス(追憶)において「主」と呼ばれているのであろう。……。群衆が真実には、イエスの十字架の献身により与えられる生命を探していることが、暗示されているのかもしれない。」 (伊吹)。

24 節. パンを食べたのが「およそ五千人」(6:10)。その群衆が全員船に乗れるとは思えない。ここでは、群衆(人々)は、主イエスを探し求めている。「イエスを探すということとは特別の意味を持っている。結果的にはイエスを否定するにもかかわらずイエスを探すのである」 (伊吹)。人は生まれながら神(主イエス)を求めている。

25 節. 「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」。文面通りだと、22 節にあるように弟子たちが船に乗って移動するとき、主イエスはそこに残っていたので、いつこちらにきたのか、ということになる。しかし、これはそのような文字通りの意味を超えた、象徴的な問いである。つまりヨハネ福音書はここに、主イエスによる救いを求めてその後を追いかけていく者たちが共通して抱く問い、主イエスはいつ、どのようにしてここに来て下さるのか、主イエスによる救いとほどのようなものであり、それはどのようにして与えられるのか、という問いを見ている。それはさらに言えば、主イエスとはそもそも誰なのかという、主イエスの本質にかかわる大切な問いだと言える。26 節以下の主イエスの言葉は、その大切な問いへの答えである。

26 節. 「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」。「はっきり言っておく」という言葉はこれまでにも何度か出てきた。直訳すれば「アーメン、アーメン、私はあなたがたに言う」。ヨハネ福音書においてこの言葉は、主イエスが大切なことを宣言なさる時に使われている。大切な問いに対する大切な答えがこれから語られる。

主イエスのなされた奇跡のことをヨハネ福音書は「**しるし**」と書いている。ただし、主イエスのなされた奇跡が「**しるし**」と呼ばれるのは、その奇跡が、主イエスこそが父なる神から使わされた独り子なる神であられることの「**しるし**」となることである。奇跡を見たり体験した人々が、主イエスこそ神の子であり、救い主であるという信仰を持つようになることによってこそ、その奇跡は「**しるし**」として受け止められたことになる。

ここで主イエスの前にいる群衆は、パンを食べて満腹したという体験への驚きと、自分の腹が満たされたという満足感のゆえに主イエスのもとに来ているに過ぎない。その満足感をこれからも味わい続けたいと願っている。そういう彼らの思いは、彼らが主イエスを「**王にするために連れて行こうとしてい**」た(15節)と語られていたことにも表れている。

群衆にとってこの奇跡は、主イエスを神の子と信じて従っていく、という信仰をもたらすものにはなっていなかった。それは、彼らがこの奇跡に主イエスが求める「**しるし**」を見てはおらず、ただパンを食べて満腹したことだけを見ている、ということである。

27節. 「**朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。**」

群衆が求めているのは「**朽ちる食べ物**」。それに対し、わたしがあなたがたに与えようとしているのは、朽ちない食べ物、「**いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物**」なのだ、それをこそ求めなさい、と主イエスは言われる。

5000人の人々を満腹にした、という奇跡から始まったこの第6章は、「**永遠の命に至る朽ちない食べ物**」、私たちを本当に生かす「**命のパン**」とは何か、を語ろうとしている。その朽ちない食べ物、永遠の命に至る食べ物は、「**人の子**」つまり主イエスが与えて下さるものである。主イエスが5つのパンと2匹の魚で5000の人々を満腹にしたのは、そのことの「**しるし**」としてであった。この奇跡に「**しるし**」を見た者は、「**永遠の命に至る朽ちない食べ物**」をこそ主イエスに求めていく。

「**父である神が、人の子を認証されたからである。**」

【NKJV】 because God the Father has set His seal on Him.

【TEV】 because God, the Father, has put his mark of approval on him.

「**認証された**」と訳されている言葉は、印ないし封印を押すこと。ここでは神様が保証することであり、神様が決定したということ。

28節. 「**神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか。**」

この問いは、27節の「**永遠の命に至る食べ物のために働きなさい**」という勧めとつながらないようにみえる。しかし人々は、主イエスの言葉を「**永遠の命を得るために働きな**

さい」と聞いたということ。そして彼らにとって、永遠の命を神からいただくために人間がしなければならないことは「**神の業を行うこと**」、具体的には律法を守ることであった。ここで「神の業」と訳されている言葉 (τὰ ἔργα τοῦ θεοῦ、タ エルガ トウ セウ) は、複数形になっている。十戒を考えているのだろう。彼らは、永遠の命に至る食べ物のために働くためには、どういう神の業を行ったらよいのか、律法をどのように守り行ったらよいのか、と尋ねたのである。(「**善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。**」ルカ 18:18)

29 節。 **「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」。**

主イエスの答えは彼らの常識をひっくり返すようなものであった。何か良いこと、立派なこと、正しいことをすることが神の業を行うことなのではない。神がお遣わしになった者を信じることこそが、永遠の命に至る朽ちない食べ物を得るために必要な神の業を行うことなのだとされる。

「神がお遣わしになった者」とは、言うまでもなく主イエスである。3 章 16、17 節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」とある。

神様は独り子主イエスを世に遣わして下さったほどに世を、私たちを、愛して下さっている。その神の愛を信じて受け入れ、その愛をいただきつつ生きることこそが、神の業を行うことである。私たちは、何か良いこと、立派なこと、正しいことをすることによってではなくて、主イエスによる神の愛を信じることによって、永遠の命に至る朽ちない食べ物をいただくことができる。

30—31 節。 **「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」**

これは、人々が、神がお遣わしになった者を信じるのが神の業を行うことであるならば、あなたがその神がお遣わしになった者であることのしるし、証拠を見せてほしい、と言っている言葉。そしてそこで彼らが求めている「しるし」は、やはりパンを食べて満腹することである。パンを与えて満腹させてくれれば、あなたこそ神がお遣わしになった者であると信じるができる、と言っている。

人々がその根拠としているのは、「**わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました**」という出エジプト記の第 16 章に語られている出来事である。モーセに率いられて、奴隷とされていたエジプトを脱出したイスラエルの民だったが、荒野においてパンが無くなってしまうと、モーセに不平不満を言った。その時主なる神はモーセに、あなたがた

に天からのパンを与えると告げて下さり、そのみ言葉の通りに、天からのパンである「**マンナ**」を与えて下さったのである。モーセが神に願うと、天からのパンが与えられ、民は満腹することができた、そういう記憶がイスラエルの人々の間に受け継がれていた。

主イエスが五千人の人々を満腹させた奇跡を見た彼らは、このことを思い出して、主イエスにモーセの再来を見たのであろう。約束されている救い主は、モーセのような預言者として来る、と語られているところが旧約聖書の申命記 18 章 15、18 節にある。ヨハネの 6 章 14 節に、この奇跡を見た人々が「**まさにこの人こそ、世に来られる預言者である**」と言ったことが語られていたが、それは、このイエスこそモーセのような預言者に違いない、ということである。モーセのように天からのパンを与え、満腹させてくれるイエスこそ、世に来られる預言者、救い主だ、と人々は思ったのである。

この天からのパンである「**マンナ**」は、一度限り与えられたものではない。イスラエルの民が約束の地に入るまで、毎日それが与えられ、彼らはそれを食べて荒れ野を旅していった。それと同じように主イエスにも、自分たちの日毎のパンを与え続けてほしい、そういうしるしを見せてくれれば、あなた(主イエス)こそ神がお遣わしになった救い主であることを信じることができる、と彼らは言っている。

この人々にとって、神様による救いとは、モーセのような預言者、救い主が現れて、天からのパンを与えて自分たちを養い、満腹させてくれること、日々の生活を安定させ、安心して生きていけるようにしてくれることであり、そういう救いを主イエスに求めている。

32—33 節。 **「はっきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」**

この言葉は、モーセのように天からのパンを与えて満腹にしてくれる救い主を求めることは間違いだ、ということ語っている。実はあのマンナも、モーセが与えたのではなくて、神様がその恵みのみ心によって、イスラエルの民が荒れ野の旅路を歩み続けることができるように与えて下さったものなのであって、それは主イエスの父である神様が与えて下さる「**天からのまことのパン**」を指し示すもの、その「**しるし**」なのである。

神様による救いは、パンによって満腹し、安心して生活できるようになることにあるのではなくて、主イエスの父なる神が与えて下さる「**天からのまことのパン**」をいただくことにこそある。主イエスの父なる神様が与えて下さる天からの「**まことのパン**」、つまり「**神のパン**」は、「**天から降って来て、世に命を与えるものである**」。それは 3 章 16 節に語られていたように、独り子主イエス・キリストご自身である。主イエスこそ、父が与えて下さる天からのまことのパンであり、いつまでもなくなることはない、永遠の命に至る食べ物である。